

第68回 東北学校保健学会プログラム 令和3年度 東北体育・スポーツ学会プログラム

受付 9:30～ (会場:宮城教育大学2号館3階)

開会 10:00～ (会場:宮城教育大学2号館3階 232教室、233教室)

◎一般口演 (会場:宮城教育大学2号館3階 232教室、233教室)

① 会場:232教室

I. 10:00～10:50 座長:藤本 敏彦先生(東北大学)

1. 小学校学習指導要領における持久走の変遷

○武田 東子(宮城教育大学初等教育教員養成課程体育・健康コース)

沼倉 学(宮城教育大学)

2. 仙台市の小学校体育におけるタグラグビーの実施状況について ～アンケート調査より～

○山田 佑太(宮城教育大学初等教育教員養成課程体育・健康コース)

沼倉 学(宮城教育大学)

3. タグ・ラグビーの指導方法に関する研究ー小学校高学年を対象としてー

○黒田 栄彦(宮城教育大学附属小学校)

佐藤 亮平、沼倉 学(宮城教育大学)

4. バスケットボール競技のディフェンスに関する研究ーピックアンドロールに着目してー

○大沼 琉亜(宮城教育大学中等教育教員養成課程保健体育専攻)

池田 晃一(宮城教育大学)

5. 中国競技スポーツの選手育成システムについての研究

○何 佳儷(仙台大学大学院スポーツ科学研究科)

齋藤 浩二(仙台大学 現代武道)、頼 羿廷(仙台大学 体育学部)

II. 11:00～11:50 座長：高野 淳司 先生（東北工業大学）

6. 「ダンプ園長の荒馬」の成立過程

○唐牛 友里菜（宮城教育大学初等教育教員養成課程体育・健康コース）

沼倉 学（宮城教育大学）

7. バスケットボール競技における練習場面ごとのイメージ利用目的の調査

○今野 雄一郎（宮城教育大学中等教育教員養成課程保健体育専攻）

池田 晃一（宮城教育大学）

8. バレーボールのスパイクにおける視覚探査策に関する一考察

○佐藤 駿斗（宮城教育大学中等教育教員養成課程保健体育専攻）

池田 晃一（宮城教育大学）

9. GPS を用いたサッカー選手のパフォーマンス分析ー男子大学生を対象にー

○佐藤 亮平（宮城教育大学）

10. 教材論における歴史研究の射程

○沼倉 学（宮城教育大学）

② 会場：233 教室

I. 10:00～10:50 座長：伊藤 常久 先生（東北生活文化大学）

11. 高校生アスリートにおける体格向上とケガ予防に関する研究

ービタミンD 摂取に着目してー

○齋藤 美空、川俣 幸一（東北生活文化大学）

12. 中学硬式野球チームへの増量をテーマとした栄養サポート研究ー成長曲線との比較による検討ー

○川俣 幸一（東北生活文化大学）、工藤 岬（東北生活文化大学卒業生）

13. ジェンダーからみる東京オリンピックネットニュースの内容分析

○謝 良（仙台大学・スポーツ科学研究科）、永田 秀隆、馬 佳濤（仙台大学）

14. 高専生における Grit と体力テストおよび運動習慣との関係

○高野 淳司(東北工業大学)、安倍 健太郎(一関工業高等専門学校)、本田 春彦(東北工業大学)

15. インクルーシブ体育を目指した教材づくり～余白のある教材の可能性～

○村上 修慈(宮城教育大学中等教育教員養成課程保健体育専攻)
沼倉 学(宮城教育大学)

II. 11:00～11:50 座長：川俣 幸一 先生(東北生活文化大学)

16. 新型コロナウイルス感染症流行時における在宅療養児と家族の困難と支援に関する検討ー通所施設のスタッフへの調査を通じてー

○木元 鈴乃(東北大学病院)、大高 麻衣子(秋田大学大学院医学系研究科)、菊地 麻里(秋田大学大学院医学系研究科)、八代 美千子(多機能型重症児者デイサービスにの
に)

17. 「保健室利用カード」と保健室利用の実態に関する研究

○湯田 ひかり(青森県三沢市立古間木小学校)、新谷 ますみ(弘前大学教育学部)

18. 子どもが感じる「居場所のなさ」とは何か～中高校生時代に「居場所のなさ」を感じた経験を持つ大学生の語りから～

○藤原 実乃里(秋田県立ゆり支援学校)、新谷 ますみ(弘前大学教育学部)

19. 中学生いじめ自殺ー1980～90年代と2014年以降の比較

○瀧澤 透(青森県立保健大学)

20. 学生の健康と保健行動及び社会的スキルに関する研究

○伊藤 常久(東北生活文化大学家政学部)

○昼食・休憩 12:00～13:15

※昼食・休憩は、各自お取り下さい。

232 教室と 233 教室を使用する事ができます。

休憩中における新型コロナウイルス感染症予防にご協力ください。

※食事中の飛沫予防、三密の回避、十分な換気等をお願いいたします。

◎第 68 回東北学校保健学会/東北体育・スポーツ学会企画

特別講演 13:40～15:10(会場:宮城教育大学 2 号館 3 階 230 教室)

日本スポーツ界でのメンタルヘルスケアのあり方を考える
～アスリートの、アスリートによる、みんなのためのメンタルヘルス～

講師 小塩 靖崇 先生

(国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター)

司会 藤本 敏彦 先生

(東北体育・スポーツ学会代表理事・東北大学)

◎閉 会の挨拶 15:20

○一般口演

① 会場：232 教室

I. 演題番号 1. ～5.

10:00～10:50 座長：藤本 敏彦先生（東北大学）

II. 演題番号 6. ～10.

11:00～11:50 座長：高野 淳司 先生（東北工業大学）

② 会場：233 教室

I. 演題番号 11. ～15.

10:00～10:50 座長：伊藤 常久 先生（東北生活文化大学）

II. 演題番号 16. ～20.

11:00～11:50 座長：川俣 幸一 先生（東北生活文化大学）

小学校学習指導要領における持久走の変遷

○武田 東子(宮城教育大学), 沼倉 学(宮城教育大学)

キーワード：小学校学習指導要領, 持久走, 長距離走

【目的】

学校時代の嫌いな種目の代表に上げられることが多く(品田, 2010), 多くの児童にとって「つかれる・しんどい・きつい」(油野, 2000) 種目として捉えられている持久走が小学校学習指導要領ではどのように扱われてきたのか, その変遷を辿り整理することで, 持久走嫌いが多く生まれた背景を探ることを目的とする。

【方法】

各年代の小学校学習指導要領における持久走や, それに相当する内容について整理し, 先行研究の結果と合わせて考察する。

【結果】

○S33 年：陸上運動(2-6 年)

- ・約 2 分間みんなで調子を合わせてかけ足をする。(3 年)
- ・同じような調子で約 600m 走る。(5 年)

○S43 年：陸上運動(2-6 年)

- ・同じ調子で約 2 分間かけ足をすること。(3 年)
- ・100 メートルを 30 秒ぐらいの速さで走ること。※距離は約 800m。(5 年)

○S52 年：基本の運動(1-4 年), 体操(5-6 年)

- ・力強い動き及び動きを持続する能力を高める運動をすること。(5-6 年)

○H 元年：基本の運動(1-4 年), 体操(5-6 年)

- ・力強い動き及び動きを持続する能力を高める運動をすること。(5-6 年)

○H10 年：基本の運動(1-4 年), 体づくり運動(5-6 年)

※体操が体づくり運動へ変更。

○H20 年：体づくり運動(1-6 年)

- ・無理のない速さで 5～6 分程度の持久走をすること。(5-6 年)

○H29 年：体づくり運動(1-6 年)

※運動が苦手な児童への配慮の例が記載。

【考察】

持久走についての記載は変化してきているが, 「同じ調子で」「一定の速さで」「無理のない速さで」など, 一定時間を無理のない速さで走り続けることは共通している。

しかし, 陸上運動から体づくり運動(体操)へ変遷していく中で, 長距離走との混同があったのではないかと考える。長距離走はタイムの短縮や競走が求められる。特に, S52 年-H10 年までは基本の運動の中で様々な運動の基礎を学ぶようになり, 鈴木ら(2016)はこの時期を「陸上系と体づくり運動としての持久走」という概念として捉えている。このことから持久走の学習でも, タイムや競走を意識するような指導があったのではないかと考える。

【まとめ】

持久走は, 陸上運動から体づくり運動(体操)へ区分が変更されてきた。持久走という概念の大きな変化はあまりなかったものの, 区分が変更されたことで指導のあり方がどのように変化してきたのか今後さらに検討していきたい。

【参考文献】

- ・文部省, 文部科学省(1958,1968,1977, 1989,1998,2008,2017) 小学校学習指導要領
- ・鈴木真綾, 鈴木一成, 上原三十三(2016)「体育授業における[持久走]の概念と指導方法に関する検討」(愛知教育大学保健体育講座研究紀要)

仙台市の小学校体育におけるタグラグビーの実施状況について

～アンケート調査より～

○山田 佑太（宮城教育大学），沼倉 学（宮城教育大学）

キーワード：タグラグビー，アンケート調査，年間指導計画

【目的】

本研究の目的は，仙台市の小学校体育におけるタグラグビーの実施状況について，アンケート調査と先行調査の結果から，その特徴を明らかにすることである。

【方法】

2021年6月25日から7月31日にかけて，仙台市内小学校（119校）にGoogleフォームを用いたアンケート調査を行った。調査内容は主に，直近3年間のタグラグビーの実施状況や実施理由，実施学年，実施内容等であった。その結果から実施状況をまとめた。

【結果】

仙台市内の53校の小学校から回答を得た（回答率：44.5%）。その回答結果の一部を以下にまとめた。

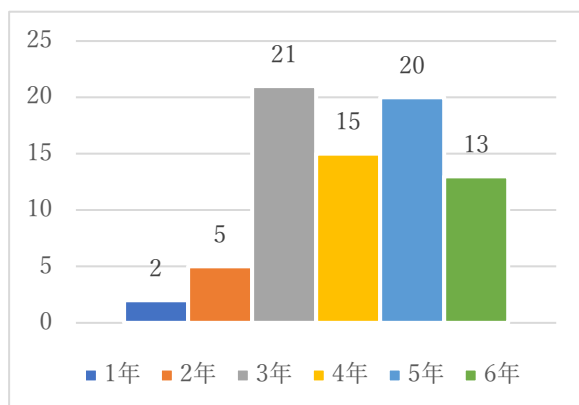
○直近3年間のタグラグビーの実施状況

- ・実施した：69.8%（37校）
- ・実施していない：30.2%（16校）

○タグラグビーを実施する理由

- ・年間指導計画に位置づいている：81%（30校）
- ・新学習指導要領に明示された：43%（16校）

○タグラグビーの実施学年



【考察】

アンケート調査に回答した小学校の中でタグラグビーを実施した小学校は69.8%（37校）だった。平成28年度にスポーツ庁が行った調査で，ラグビーワールドカップ開催地の小学校体育におけるタグラグビー実施率は49%だった。このことから，仙台市では多くの小学校体育でタグラグビーを実施していることが考えられる。

タグラグビーを実施している理由については，「年間指導計画に位置づいている」が多く，また，タグラグビーの実施学年については小学3年生と5年生で特に多く実施されていた。仙台市の小学校体育の副読本「体育の学習」には3年生と5年生の副読本にタグラグビーの記載がある。したがって，ほとんどの小学校では年間指導計画に基づいた授業づくりが行われているのではないかと考えられる。

【まとめ】

アンケート調査から，仙台市の小学校でのタグラグビーの実施率は高いことが分かった。その背景には，体育の副読本に基づいた年間指導計画に沿った教育が行われていると考えられる。今後の課題としては，いくつかの小学校にさらなるインタビュー調査等を行い，タグラグビーを実施するねらいや実態についても追究していきたい。

【参考文献】

公益財団法人 日本ラグビーフットボール協会
普及育成委員会，平成28年度スポーツ庁「2019
ラグビーワールドカップ普及啓発」委託事業による調査報告書 概要。

タグ・ラグビーの指導方法に関する研究ー小学校高学年を対象としてー

黒田 栄彦（宮城教育大学附属小学校）、佐藤 亮平（宮城教育大学）、沼倉 学（宮城教育大学）

キーワード：タグ・ラグビー，ルールづくり，戦術，技術，

【目的】

タグ・ラグビーとは、ラグビーの身体接触を「タグ」に置き換え、ルールも簡易化され、初心者でも取り組みやすいスポーツとされている。また、平成29年に改訂された『学習指導要領』の球技領域においても、ボール運動の種目として例示されている。加えて、石崎ら（2021）は、チーム学習ということに着目して、指導を行っている。しかし、これらの研究ではルールとゲームとの関係性やルールと技術や戦術とのかかわりについて十分に検討されていない。ゲームを理解することは、そこで生じる現象に対する相互理解が必要不可欠である。そのためにスポーツにはルールが存在する。それゆえ、ゲームを理解することは、ルールを理解することとも不可分な関係性を有している。

以上のことから、本研究ではルールづくりに着目したタグ・ラグビーの指導方法を立案し、小学校高学年を対象に行った実践を基に、その成果と課題について考察することを目的とする。

【方法】

本研究では小学校5年生の29名を対象に行った授業を分析した。授業時間数は15時間行い、話し合いについては7時間行っており、体育館での実施は8時間であった。主な単元計画は表1に示すとおりである。本研究で用いる資料は、授業で用いた学習カードに記載されている内容とした。なお、学習カードに記載されている内容については教師が学級通信としてまとめ、話し合いの資料として用いた。

【結果】

本研究が対象とする授業は、表1の単元計画にあるように、体育館で実技を行った後に、話し合いを行うといった形で進められた。

まず初めに、体育館での①ー③時間目の授業後には、「ゲーム理解」を進めるためのルールやマナー

についての話し合いが行われた。そこでは、①の体育館での授業の際に、教師によって提示されたルールを基に試合を行った時に生じたプレー上の問題が話し合われていた。

こうした話し合いを続けていく中で、体育館での③時間目の授業後に行った話し合いでは、守備をいかにして突破し、得点を奪うかといった攻撃方法に関する話し合いが始まった。その後、体育館での④時間目には、実際にどうやって攻撃を展開するかを、守備の目線から思考しようとしていた。

その後、④の授業後の話し合い後は、体育館での⑤・⑥に影響を与え、そこでの授業はパスをどのようにつなぐかといったゲームにおいて攻撃をどのように構築するかといった思考過程へと子どもたちが進んだ。

最後の⑦・⑧時間目には、作戦を考え、チームでどのように攻撃を展開するかといった思考過程へと子どもたちが進んだ。

【考察】

本研究が対象とした授業では、体育館での授業と教室での授業の往還する方法を用いた。その結果、単元の序盤にはゲームを理解することに重点が置かれていた子どもたちの思考過程が、徐々にゲームに潜伏する戦術的課題へと向かい、最終的にはチームとしてどのようにプレーするかといった方向へ向かった。こうした結果が示唆するのは、ゲームの理解の進展が戦術的課題へと子どもたちの思考を誘うということであり、単元序盤に教師から一方的に戦術を教授することは子どもの思考はゲーム理解との二重のフレームが生じているということである。それゆえ、学習初期には焦らずゲーム理解を促し、さらにはルールを共通理解することが重要であることが考えられた。

場所	時間数						
	①ー③ ゲーム理解		④ 攻撃の模索	⑤・⑥ パスのつなぎ		⑦・⑧ 作戦	
教室	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦

表1 単元計画

中国競技スポーツの選手育成システムについての研究

○何 佳儷（仙台大学大学院スポーツ科学研究科）、齋藤 浩二（仙台大学）、頼 羿廷（仙台大学）

キーワード：中国、競技スポーツ、選手育成システム、専業隊

【目的】

本研究の目的は、中国の競技スポーツの選手育成システムについて把握して、中でも中国の選手の練習や学習環境、さらに選手引退後の進路についての現状を探り、改善点を考察することである。

【方法】

文献調査を通して、中国の選手育成システムの現状を整理する。また、「専業隊」選手へのインタビュー調査を通して、選手が「専業隊」での練習状況と学習環境、引退後の就学や就職の現状について確認する。

【結果】

1. 中国競技スポーツの選手育成システムの現状

中国の選手育成システムはピラミッド型の「三級訓練体制」（図1）といわれている。最下層は各伝統体育学校と小中学校運動チームであり、中層は各市代表チームとアマチュア体育学校である。この2層段階を「非専業隊」と呼ばれている。「非専業隊」選手は、省レベル大会での優勝やコーチに発掘によって、「専業隊」とも呼ばれる各省代表チーム、さらに国家代表チームの一員に選ばれることがある。「専業隊」隊員は毎月国から給料が支払われ、競技の結果によって報酬が得られる。「専業隊」に入れる選手の平均年齢は12歳頃であり、中国浙江省「専業隊」の場合は、「浙江体育職業技術学院」という全寮制の教育機関で共同生活を行う。基本的に毎日午前、午後各3時間、主に水泳の練習をしている。休みは毎週半日から一日ぐらいである。また、練習以外に学習時間はあるが、基本的に練習後の夜間であり、一日平均2-3時間程度である。



図1 三級訓練体制の仕組み

2. 中国「浙江省水泳専業隊」の選手のインタビュー調査

	NO.1(女、25才)	NO.2(男、28才)	NO.3(女、25才)	NO.4(女、28才)	NO.5(女、28才)
入隊期間	11歳～18歳(7年間)	12歳～22歳(10年間)	14歳～24歳(10年間)	12歳～19歳(7年間)	11歳～23歳(12年間)
入隊経緯	省レベルの大会での優勝	専業隊のコーチから選抜された	市代表チームのコーチに推薦された	専業隊のコーチから選抜された	省レベルの大会での優勝
運動等級	入隊前：一級（省レベルの大会） 入隊後：国家級健将(国家レベルの大会)	入隊前：一級（省レベルの大会） 入隊後：国家級健将(国家レベルの大会)	入隊前：一級（省レベルの大会） 入隊後：国家級健将(国家レベルの大会)	入隊前：一級（省レベルの大会） 入隊後：国家級健将(国家レベルの大会)	入隊前：一級（省レベルの大会） 入隊後：国際級健将(国際レベルの大会)
学習状況	入隊前：小学校で学ぶ 入隊後：毎日2時間	入隊前：小学校で学ぶ 入隊後：毎日2～3時間	入隊前：中学校で学ぶ 入隊後：毎日2時間	入隊前：小学校で学ぶ 入隊後：毎日2時間	入隊前：小学校で学ぶ 入隊後：毎日2～3時間
練習状況	入隊前：毎日放課後2時間(杭州市青少年体育学校で行う) 入隊後：毎日6時間	入隊前：毎日放課後3時間(温州市アマチュア体育学校で行う) 入隊後：毎日6時間	入隊前：毎日放課後3時間(紹興市アマチュア体育学校で行う) 入隊後：毎日6時間	入隊前：毎日放課後2時間(浙江省アマチュア体育学校で行う) 入隊後：毎日6時間	入隊前：毎日放課後2時間(杭州市代表チーム) 入隊後：毎日5～6時間
休み	入隊前：週1日 入隊後：年7～14日	入隊前：週1日 入隊後：年7～14日	入隊前：週2日 入隊後：年7～14日	入隊前：週1日 入隊後：年7～14日	入隊前：年3～7日 入隊後：なし
引退原因	競技力が向上できない	競技力が向上できない	怪我	怪我	怪我と競技力が向上できない
引退後の進路	大学に入学し、卒業後、小学校の体育教師	1年後、水泳クラブを創業	日本の大学院の入学試験を受験予定	1年後、市代表チームのコーチ	水泳クラブのコーチ
最終学歴	大学卒業(スポーツ分野)	大学卒業(スポーツ分野)	大学卒業(スポーツ分野)	大学院在籍中(スポーツ分野)	大学卒業(非スポーツ分野)
引退後の問題点	大学入試では、競技力があるからといって、普通の学生と競争するので、勉強において大きなストレスがあった。	特になし	今後の就学・就業の範囲がスポーツ専門に限られ、他の専門分野に触れるのは難しい。	社会人になってから、ある程度の社会能力、経験及び学力が足りないと感じた。	練習中心の大学生活では非スポーツ分野への就職に必要な知識・能力が身につくことができなかったため、断念した。

【考察】

- 中国の競技スポーツ選手の育成システムでは、普通学校の運動部、体育学校の児童・生徒、地域の選手を非専業隊として組織する。これは、スポーツに興味を持つ若年層を幅広く・漏れなく集め、才能のある選手を早期に発見することを意図したものである。また、専業隊に選ばれた選手は、中学校段階前後（11歳～）からプロ選手のように給与が保証されており、国家的な事業として競技選手の育成が行われている。
- 効率的に競技スポーツの選手育成が図れたものの、選手にとっては練習以外の学習時間が少ないため、学力低下の問題とつながり、専業隊引退後の進路がスポーツ・体育の分野に極端に偏ることが確認できた。
- おわりに：本研究では中国・浙江省の水泳種目（中国浙江省水泳専業隊）を対象に調査した。今後、選手の学習環境の整備や学力の確保など選手のキャリアプランにかかわる側面について、さらなる調査・分析を行うことが、本研究の残された課題のひとつとなっている。

【参考文献】

- 周莹,申萍,张博等(2011)中国竞技运动训练发展研究[J]. 体育文化导刊, (07):69-72.
- 王骅磊(2017).中英竞技体育发展模式的比较研究.吉林体育学院学报.第33卷-p50
- 刘平(2018).我国专业运动队管理模式研究.体育大视野.第8卷.P201-202

「ダンプ園長の荒馬」の成立過程

○唐牛 友里菜（宮城教育大学），沼倉 学（宮城教育大学）

キーワード：ダンプ園長の荒馬，成立過程，わらび座の荒馬，今別荒馬

【目的】

本研究の目的は、全国や宮城県内の保育所や幼稚園等で数多く実践されている高田敏幸が教材化した「ダンプ園長の荒馬」^(注)について、その成立過程を明らかにすることである。

【方法】

高田が荒馬について発表している 3 つの論稿や研修会資料を発表年代順に整理し、その変遷から成立過程について考察する。

【結果】

・「耕せ耕せ，ぼくらのからだ」(1982)

「日本の子どもに日本の踊りを」という内容の中に、荒馬について記載されている。振りは「プランセ（駒足）」「ステップホップ」という 2 種類が記されていたが、具体的な内容については記されていない。

・楽しい体育シリーズ⑧「なわとび・民舞」(1988)

この資料では、対象を小学 2 年生として指導計画や空間の使い方など、具体的な教材「荒馬」が記載されている。振りは「はやがけ」「二つ跳び」「休み・きめ」「かもしか跳び」「いななき」「むきかえ」「四つ跳び」の 7 種類ある。

・仙台保問研，春の基礎講座資料より（2002）

ここでは今別荒馬について、歴史的 content や踊り、民俗舞踊「荒馬」の教材的意義など詳しく記されている。対象は主に 5 歳児となっており、振りは「ふりむき」「脚だし」「二つ跳び」「四つ跳び」の 4 種類になっている。

【考察】

1982 年の資料で「荒馬」が登場していることから、既に高田は教材として取り入れていたことがわかる。しかし、具体的な内容が示され

ていないことから、まだ教材として完成していなかったと思われる。1988 年では振りの内容から「わらび座の荒馬」をベースにしていたと考えられる。2002 年では、内容から「今別荒馬」をベースにし、より現地で踊られている形に近いものとなっている。1982 年では大まかな内容だったが、わらび座、今別荒馬をベースにしたものへと変化し、現在に至っている。

これは子どもの実態や保育内容の変化、高田の民俗芸能の捉え方や教材的価値観の変化によるものだと考える。この変化の理由は今後の研究で考察していく。

（注）沼倉によると、荒馬には「民俗舞踊としての荒馬」と「教材化された荒馬」がある。

「民俗舞踊としての荒馬」は青森県津軽地方で伝わる踊りで、「今別荒馬」はその 1 つである。「教材化された荒馬」には、民族歌舞団わらび座が教材化したもの、学校体育研究同志会民俗舞踊分科会が教材化したもの、高田敏幸（通称ダンプ園長）が教材化したもの、の 3 つがある。

【参考文献】

- ・高田敏幸（1982）. 耕せ耕せ，ぼくらのからだ. 青木書店：pp254-263
- ・学校体育研究同志会編（1988）. たのしい体育シリーズ⑧なわとび・民舞. ベースボール・マガジン社：pp76-95
- ・高田敏幸（2002）. “わらしこ”まるごとこだわる荒馬. 仙台保育問題研究協議会，春の基礎講座
- ・沼倉学（2020）. 「民舞」とは何ですか？. 楽しい体育・スポーツ，39(1)：pp38-41

バスケットボール競技における練習場面ごとのイメージ利用目的の調査

○今野 雄一郎, 池田 晃一 (宮城教育大学)

キーワード：KH Coder,抽出語リスト,共起ネットワーク

【目的】

バスケットボール競技の練習中の競技場面を分類し,場面ごとのイメージ利用目的を調査する。

【方法】

M 大学女子バスケットボール部員 11 名に対して質問紙調査を行った。調査期間中,M 大学女子バスケットボール部の練習を観察し,その中で行われた練習を日々記録し,リスト化した。そしてそれぞれの練習項目について,部員に①「練習を行う目的」,②「練習中のイメージ利用目的」をそれぞれ記述式で回答してもらった。得られた回答を,計量テキスト分析ソフト KH coder より,①「練習を行う目的」には抽出語リスト,②「練習中のイメージ利用目的」には共起ネットワークを用いて分析した。

【結果】

①「練習を行う目的」

約 1 か月の調査期間中の M 大学女子バスケットボール部の練習から 21 項目の練習が得られた。それらを抽出語リストを用いて分析しながら「ボールゲーム指導辞典」を参考に分類すると,17 種類の練習の目的を抽出することができた。

②「練習中のイメージ利用目的」

質問紙より得られた 21 項目の練習のイメージ利用目的をそれぞれ共起ネットワークにより分析した。その後,抽出された語の出現頻度や語と語のつながりの強さの程度により,そのイメージ利用目的の解釈を行った。図 1 は一例として 1 つの練習の共起ネットワークを示している。この図から「イメージ」,「自分」,「相手」,「動き」という語群を【自分の動きに対する自分の動き】、「試合」,「1on1」,「場面」という語群を【実際の試合中の 1on1】と解釈した。このように練習メニュー 21 項目それぞれのイメージ利用目的の解釈を行ったところ,1 つの練習メニューに対して 1~4 つの解釈が得られた。

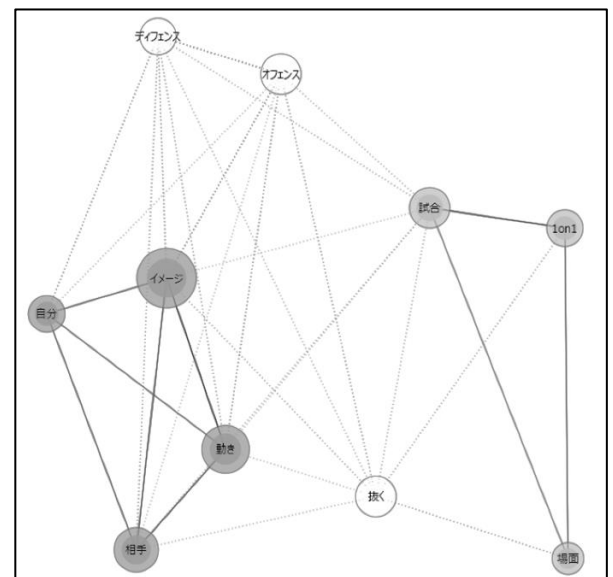


図 1

【参考文献】

- 1) 相川 聖・高井 秀明 (2020) 競技場面と競技特性の違いによるイメージ利用目的の調査 日本体育大学スポーツ科学研究 Vol. 9, p12-23
- 2) 水口 暢章・彼末 一之 (2017) 運動イメージと運動パフォーマンス
- 3) 長谷川 望・星野 公夫 (2002) スポーツ選手のスキルと身体運動イメージの関係 順天堂大学スポーツ健康科学研究 第 6 号 p166-173

バレーボールのスパイクにおける視覚探索に関する一考察

○佐藤 駿斗，池田 晃一（宮城教育大学）

キーワード：バレーボール, スパイク, 視覚探索, 簡易視野推定

【目的】

本研究においては、上級者はスパイク時にどこをどのような順序で見ているかを明らかにし、視線移動のモデルを作成することを目的とする。

【方法】

梅崎ら(2014)によって行われた研究を参照し GoProHero9 を額に装着し、簡易的視野推定を行う。また、その中でアンケートによる内省調査を並行して行い、実際に記録された映像と被験者が見ていると考えているところでの対応を図る。4つのパターンを作成し、スパイクの動きを5つの局面に分割し、各局面において、どこを見ているのか映像と内省調査から分析・検討を行う。内省調査については計量テキスト分析を行い、データの客観性を保てるようにした。

【結果】

上級者グループの被験者として、3 人の実験を行ったが、その中の 1 人は、映像と内省調査での対応がほとんど見られなかったこと、内省調査の内容で見るべきところに具体性と一貫性がなかったことから上級者グループから除外した。被験者 1 はパターン 1・2 の局面 2 において、ブロックを視認している様子が記録された。被験者 2 はパターン 1・2 の局面 4 においてブロックを視認している様子が記録された。被験者 2 は被験者 1 に比べるとブロックの視認が遅かったが、決定率としては被験者 2 の方が高かった。理由として、自身が踏み切る直前にブロックを視認することで実際にブロックが飛ばれる位置に近い状態を把握することができ、空中でのブロッカー位置の予測がしやすかったことが考えられる。パターン 3・4 においては両被験者とも局面 1~3 まではボールを追従している様子が記録された。チャンスボールに比べてサーブレシーブは返球が安定しづらいため、せんった一の移動量が大きくなる。そのため、セッターがどこからトスを上げるのかを把握するためにボールの追従が行われたことが考えられる。また、被験者 1 の局面 5 においてブロックが記録されている場面があった。その内省調査の中でブロックを認知後に、コースを選択したことが記述されていた。田中ら（2003）によると相手の状況を認知し、状況を把握して行動することが適切なプレーにつながると述べられており、見方として適切であるといえる。

◇ブロッカーの位置、枚数、手の位置を	確認	し、打つコースを確定させる。◇ブロッカー
させる。◇ブロッカーの枚数、での位置を	確認	し、どこに打つかを決める。◇ブロッカーの
一の手の位置をみて、当てるか抜くかを	確認	する。◇手の位置を確認し、抜くのが当
てるか抜くかを確認する。◇手の位置を	確認	し、抜くのが当てるのかを決める。◇手の
のかを決める。◇手の位置、まいすうを	確認	する。◇どのコースに打つかを確認するた
すうを確認する。◇どのコースに打つかを	確認	するため、手の位置、枚数を確認する。◇
つかを確認するため、手の位置、枚数を	確認	する。◇相手の手の位置をみて、どのコ
手の位置をみて、どのコースに打てるかを	確認	した。◇ブロッカーの手の位置をみて、打
て、どこに打つかをきめた。◇手の位置を	確認	し、どこに打とうかと考えた。◇一瞬、トス

図 1 被験者 1 抽出語リスト

◇ブロッカーの位置、枚数、手の位置を させる。◇ブロッカーの枚数、での位置を 一の手の位置をみて、当てるか抜くかを てるか抜くかを確認する。◇手の位置を のかを決める。◇手の位置、まいすうを すうを確認する。◇どのコースに打つかを ひくかを確認するため、手の位置、枚数を 手の位置をみて、どのコースに打てるかを て、どこに打つかをきめた。◇手の位置を	確認し、打つコースを確定させる。◇ブロッカー 確認し、どこに打つかを決める。◇ブロッカーの 確認する。◇手の位置を確認し、抜くのか当 確認し、抜くのか当てるのかを決める。◇手の 確認する。◇どのコースに打つかを確認するた 確認するため、手の位置、枚数を確認する。く 確認する。◇相手の手の位置をみて、どのコ 確認した。◇ブロッカーの手の位置をみて、打 確認し、どこに打とうかと考えた。◇一瞬、トス
---	--

図 1 被験者 1 抽出語リスト

【参考文献】

- 1) 梅崎さゆり,野村照夫,来田宣幸 (2014) バレーボール選手のミニゲームにおける視覚探索活動
- 実践的場面におけるデータ採取の試み - スポーツパフォーマンス研究
- 2) 田中雅人 (2003) ボールゲームに求められる認知スキル 愛媛大学教育学部保健体育紀要

GPS を用いたサッカー選手のパフォーマンス分析—男子大学生を対象に—

佐藤 亮平 (宮城教育大学)

キーワード：サッカー,GPS,パフォーマンス,大学生,試合

【目的】

2018 年にロシアで開催されたサッカーワールドカップは、フランス代表が 2 度目の優勝を果たした。サッカーの世界では、メジャーな大会の後、テクニカル・レポートが統括団体である FIFA や UEFA から発刊され、選手やチームのパフォーマンス分析が行われている。実際に、2018 年ワールドカップロシア大会においても、テクニカル・レポートが発刊されている。その中では、科学的に選手あるいはチームのパフォーマンスを測定することが試みられている

(FIFA,2018 ;JFA,2018)。とりわけ、Global Positioning System (以下、GPS と略す) を用いた分析は、試合における選手の動きを客観的に示すことができる機器として使用され、日本の最高峰のプロリーグである J 1 リーグにおいても、選手の走行距離やスプリント回数 (24 km/h 以上で走った回数)、チーム全体の走行距離がホームページ上で公表されている (J リーグ,2021)。また、GPS はプロサッカー選手のパフォーマンスのみならず、大学生や高校生といった育成年代での活用、学校体育の授業に用いられている (末永ら,2021 ; 中西ら,2019 ; 中西ら,2021)。このようにして GPS は、トレーニングあるいはゲームにおける走行距離と心拍数、リーグ戦におけるチームの動きに関するデータを蓄積している。

しかしながら、サッカーを量的に分析する際には、考慮すべき事項がある。それは自チームの動きが相手チームとの影響関係から相対化されてしまうという点である。サッカーという競技は、ボールの所有権によって攻撃と守備といった局面が循環する構造を維持しながら時間が進むという特徴を持つ。それゆえ、相手チームの影響を受けずにプレーできない。こうした影響については、球技には complex system が存在し、自己組織化という観点から、ゲームを捉えようとする研究からも示唆されるだろう (Lebed,2006)。こうした問題に対し、本研究ではフォーメーションの構造に着目して、データを解釈することを試みることで解決の糸口を探ってみたい。

以上のように、本研究ではサッカーにおける構造を考慮したサッカー選手の動きについて分析することを目的とする。

【方法】

本研究では M 大学のサッカー部に所属する大学生を対象とした。また、対象とする試合については東北大学サッカーリーグにおける 2 部南における試合とした。データの取得には、GPS 及び心拍データを取得することができるウェアを装着し、そのデータを iPad に記録する方法を用いた。なお、GPS およびウェアに関しては SOLOTILO Knows 社の機器を用いた。分析項目は、「総移動距離」「心拍数」「スプリント」とした。各データは、ゴールキーパーを除いた先発選手の数値とし、交代した場合には交代するまでの記録を交代時間で除し、それを 90 分換算した数値を用いた。さらに、データの取得ができなかった先発選手に関しては、他の試合で記録したデータの平均値を採用し、代替した。これらの分析項目を対戦チームの戦術的構造との関りを考慮し、選手のパフォーマンスについて考察した。

【結果】

GPS のデータを集計した結果、「総移動距離」については、第 1 試合が 110.22 km、第 2 試合が 115.83 km、第 3 試合が 107.33 km、第 4 試合が 118.7 km であった。「スプリント」の回数については、第 1 試合が 85 回、第 2 試合が 91、第 3 試合が 83 回、第 4 試合が 106 回であった。

【考察】

「総移動距離」については、試合ごとの上下はあるものの、第 1 試合と第 4 試合では約 8.5 km も距離が伸びている。また、「スプリント」の回数も、第 4 試合が最高値を記録している。ただし、第 1 試合の対戦相手が用いた戦術と第 4 試合の相手とでは戦術が異なっていることを考慮すると、相手チームに応じて走りを使い分けしていると考えられた。つまり、M 大学の選手は相手チームの戦術に併せて走りを使い分け、戦術的に対応していたのではないかと考えられた。

【主要文献】

FIFA (2018) Technical Report 2018 FIFA WORLD CUP RUSSIA™.

日本サッカー協会技術委員会 (2018) ロシアワールドカップ JFA テクニカルレポート。

教材論における歴史研究の射程

○沼倉 学（宮城教育大学）

キーワード：教材論，素材研究，人間形成

【問題の所在】

体育科教育学における教材論の中で、岩田（1994）は、「教材研究」とは「素材としてのスポーツを加工・改変することによって、学習内容を習得するための教材（学習活動の対象）へと組織し直すこと」と規定し、それに関わる内容について「素材研究」「教科内容研究」「教材構成」「指導過程研究」として分節化することが可能になることを示した。

これまでも歴史研究の成果を活かした教材づくりや、教材化に向けた素材研究としてのスポーツ文化研究は数多く行われてきた。その射程は広く、スポーツの技術、用具、ルールの発展史から、近代史、地域史、産業史など様々である。技術や用具の発展は、その時代背景となる産業や労働とも密接に関係しているのでどちらの研究も重要ではあるが、歴史研究の範囲や深さには際限がない。教材づくりと歴史研究の関係を理解していなければ、素材研究の場面で授業の本質とは関係のない歴史の森に迷いこんだり、授業の場面では折角時間をかけて調べた歴史的事実を単なる知識の伝達で終わらせてしまったりする。

【目的・方法】

そこで本研究は、教材論における歴史研究の射程と教材づくりの関係について検討を行うことを目的とする。中村と岩田の教材論を考察の対象とする。

【結果・考察】

中村は「体育科教育は（中略）人間形成の役割を果たさなければならない」とし、教材の素材となる「運動文化」がもたらす「人間形成」には、「身体的・技術的側面と同時に、思想的・精神的側面も存在する」と述べている。そして、「教材が教材として価値を持っているかどうかは、このように人間形成における二側面をその内部に持っているかどうかによって決定する」と指摘している。前者は「多分に全人類に共通した面をもっている」とのに対し、後者は「歴史的・民族的・階級的性格の強いもの」としている。スポーツの技術、用具、ルールの発展史は前者との関係が深く、その背景となる近代史、地域史、産業史などは後者との関係が深いといえる。

このことを岩田の教材論に重ねてみると、技術史、ルール発展史等は教材化の「内容的視点」に含まれるが、その背景となる近代史等は「内容的視点」に含まれるだけでなく、「方法的視点」を検討する教師の視野を広げることに深く関係すると考えられる。

【主な引用・参考文献】

- 岩田靖（1994）教材づくりの意義と方法. 高橋健夫編著, 体育の授業を創る. 大修館書店: 東京, pp26-34
- 中村敏雄（1963）教材の価値をきめるキメ手は何か？ 体育グループ 18, pp17-23

ジェンダーからみる東京オリンピックネットニュースの内容分析

○謝 良（仙台大学大学院スポーツ科学研究科）、永田 秀隆（仙台大学）、馬 佳濤（仙台大学）

キーワード：ジェンダー、オリンピック、ネットニュース

【目的】

本研究の目的は、東京オリンピックネットニュースにおけるジェンダー問題を明らかにすることである。

【方法】

日本の2つのオンラインニュースサイトで、2021年7月21日～8月8日の期間中のシングルス競技の選手報道を対象に、定量的な内容分析を行った。定量的な内容としては、報道量、報道の長さ、競技種目、などが挙げられる。男性選手報道の長さとは女性選手報道の長さとの差では χ^2 検定を使用し、女性選手報道量と女性メダル数および女性参加人数との相関関係を検討するには2変量相関分析を用いた。

【結果】

「NHK NEWS WEB」と「読売新聞オンライン」2つのネットニュースサイトに掲載された、シングルス競技へ参加した選手に関する727件の報道を収集した。そのうち、男性選手に関する報道は376件(51.7%)、女性選手に関する報道は351件(48.3%)であった。選手の国籍別では、全体の約9割が日本人選手で占められ、日本以外の選手は合計で73件であった。二つのネットメディアとも日本人選手に多くの報道を割いており、日本以外の選手の報道は少なかった。

収集した報道は報道の長さにより、500字以内、501-1000字、1001字以上の3つに分けた。 χ^2 検定の結果によると、男性選手と女性選手の報道の間で長さに有意な差があると認められた($\chi^2=8.322$; $p=0.016$)。残差を見たところ、男性選手の500字以内の報道が少なく、1001字以上の報道が多い。一方、女性選手は500字以内の報道が多く、1001字以上の報道が少ないことを示している。

相関関係を検討した結果、日本女性選手の各競技に割かれた報道数とメダルポイントの間に、有意な関係が認められた(女性, $r=.56$; $p=.002$)。日本女性選手の各競技に割かれた報道数と女性

参加人数の間に、有意な関係が認められた(女性, $r=.505$; $p=.007$)。

【考察】

2つのネットニュースサイトで、東京オリンピックのシングルス競技の報道を分析した。その結果、男性が51.7%、女性が48.3%であった。男性選手と女性選手の報道量にほとんど差がなかった。収集した報道の競技で獲得したメダルの数は女性の方が多かった。しかし、報道量は男性選手を上回らなかった。ネットニュースにおける女性の報道については、報道量は上昇しているが、不平等は残っている。報道の長さについては、女性は500字以内、男性は1001字以上の報道が多く取り上げられた。これは、女性選手の報道量を増やしたとしても、メディアは依然として男性選手をより多くの内容で取り上げる傾向にあることを示唆している。さらに検証したところ、参加者数とメダル数の両方が、女性競技者の報道量と中程度の相関関係があることがわかった。女性の積極的な参加と成果の両方が、報道で取り上げられるための要因であることを示している。

【まとめ】

東京オリンピックのネット報道を分析したところ、ネットニュースサイトでは男女ともに報道量に一定の公平性が確保されていることがわかった。しかし、報道の長さにはより深い不平等が隠されており、メディアは男性選手により多くの内容を割く傾向がある。ナショナリズムに影響され、女性選手はオリンピック大会に参加することで国のイメージを代表する存在となり、それがメディアで取り上げられる要因となったと考えられる(Billings & Angelini, 2007)。

メディアはスポーツにおいて男性性の優位が保持されたジェンダー秩序を打破り、男女公平な報道を取り上げる必要がある。

【参考文献】

Billings, A. C., & Angelini, J. R. (2007). Packaging the games for viewer consumption: Gender, ethnicity, and nationality in NBC's coverage of the 2004 Summer Olympics. *Communication Quarterly*, 55(1), 95-111.

高専生における Grit と体力テストおよび運動習慣との関係

○高野 淳司（東北工業大学）、 安倍 健太郎（一関工業高等専門学校）、
本田 春彦（東北工業大学）

キーワード：Grit、新体力テスト、運動習慣

【目的】

近年、社会的に成功を収めている人たちに共通する特性の一つとして「Grit」が注目されている。本研究では、Grit の構成要素（興味の一貫性、努力の粘り強さ）と体力テストの結果および運動習慣（運動頻度、1 日の運動時間）の関係について検討することを目的とする。

【方法】

1) 対象者および調査内容

東北地方の高等専門学校 2、3 年次に在籍する学生 286 名（男子 227 名、女子 59 名）

① 体力・運動能力の調査：新体力テスト（スポーツ庁）

② 運動頻度および 1 日の運動時間の調査：

i. 運動頻度：新体力テストの調査票に記載の質問項目「運動・スポーツの実施状況（学校の体育の授業を除く）」

ii. 1 日の運動時間：新体力テストの調査票に記載の質問項目「1 日の運動・スポーツ実施時間（学校の体育の授業を除く）」

③Grit の調査：「日本語版グリット尺度」（竹橋ら 2019）を使用し、「興味の一貫性」と「努力の粘り強さ」を得点化

2) 分析方法

独立変数を各 Grit 得点（興味の一貫性、努力の粘り強さ）、従属変数を新体力テスト各種目の測定記録および運動頻度、1 日の運動時間とし、重回帰検定（強制投入法）

【結果】

「努力の粘り強さ」はすべての体力テストの成績、運動・スポーツの「実施頻度」と「1 日の実施時間」に影響があった。「興味の一貫性」はいずれにも影響を与えなかった。

【考察】

本研究の結果と先行研究から「努力の粘り強さ」は、まず先に運動・スポーツの実施頻度と 1 日の実施時間に影響を与え、それが体力テストの成績を押し上げたのではないかと捉えることができる。また、Grit を一まとめにして取り扱うことに対しては注意が必要であり、Grit の構成要素ごとに分けた分析が重要であることが示唆される。

インクルーシブ体育を目指した教材づくり～余白のある教材の可能性～

○村上 修慈（宮城教育大学）、沼倉 学（宮城教育大学）

キーワード：インクルーシブ体育，ルール変更

【目的】

本研究では、インクルーシブ体育を目指した教材づくりの中での、「余白のある教材」の可能性の有効性を明らかにすることを目的とする。「余白のある教材」とは、主にボールゲーム教材の中で、ゲームにおけるルール等の決定権を学習者自身に持たせ、学習過程の中で完成させていくことを目指す教材と定義しておく。

【方法】

「余白のある教材」について示唆的な2本の文献について、「ねらい」「ルール検討の方法」「学習の成果と課題」について整理し、「余白のある教材」の教育的意義について考察する。

【結果】

●広瀬・齊藤（2021）タグラグビーにおけるルール設定による主観的評価の検証－ゲーム参加者によるルール変更－

○対象：女子35名（大学3年2名、2年33名）

○ねらい

設定されたルールを変更することにより本質的な楽しさを理解すること

○ルール検討の方法

この実践は13回の授業構成で行われた。

- ・1回目：オリエンテーション
- ・2－5回目：ルール説明，技術練習，ゲーム
- ・6－9回目：戦術練習，練習ゲーム
- ・10回目：ルール設定した模擬ゲーム
- ・11－13回目：ルール設定した公式ゲーム

13回目終了後アンケートをとり，ルール変更についての有効性について調査した。

○学習の成果と課題

ゲーム参加者によるルール変更によって，学習者が競技に対して前向きに取り組んだり，難

しいルールが緩和され競技として取り組みやすくなったりすることが示唆された。

●和（2011）重度障害者を対象としたアダプテッド・スポーツの試み－肢体不自由特別支援学校における野球指導を通して－

○対象：肢体不自由児9名（小～高等部）

○ねらい

アダプテッド・スポーツの一環として「ゴロ野球」を行い，子どもたちの活動意欲を向上させること

○ルール検討の方法

「ゴロ野球」における個別ルールを，子どもたちの練習状況を見ながら実施者が相談して設定し，練習や試合を行った。

○学習の成果と課題

個別ルールを設定することで個人スキルが向上し，参加意欲や心身に良い影響を与えると考えられ，障害のある児童生徒の能力障害の改善にスポーツが有効であることが示唆された。

【考察】

2本の文献から，ルール変更を伴う教材による学習は，技術向上や活動意欲を高める効果があると考えられる。また，基になっている競技のルールを簡略化していることにより，初めて行う競技でも前向きに取り組みやすくなる。

【参考文献】

・広瀬文彦，齊藤武利（2021）タグラグビーにおけるルール設定による主観的評価の検証－ゲーム参加者によるルール変更－，白鷗大学教育学部論集，p.139-160

・和史朗（2011）重度障害者を対象としたアダプテッド・スポーツの試み－肢体不自由特別支援学校における野球指導を通して－，北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報第2号，p.57-62

◎第 68 回東北学校保健学会/東北体育・スポーツ学会企画

特別講演

日本スポーツ界でのメンタルヘルスケアのあり方を考える
～アスリートの、アスリートによる、みんなのためのメンタルヘルス～

小塩 靖崇 先生

(国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター)

司会

藤本 敏彦 先生

(東北体育・スポーツ学会代表理事・東北大学)

日本スポーツ界でのメンタルヘルスケアのあり方を考える ～アスリートの、アスリートによる、みんなのためのメンタルヘルス～

小塩靖崇

(国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 地域・司法精神医療研究部)

キーワード：アスリート、メンタルヘルス、思春期、学校保健

2021 年は、著名なアスリートのメンタルヘルス不調や治療経験の告白を機に、アスリートのメンタルヘルスやそのケアのあり方について考える一年となった。スポーツは心と身体の健康に寄与するものであり、それを生業とするアスリートは「強靱な精神を備え、メンタルヘルス不調とは無関係だ」と信じられている場合がある。アスリート自身、周囲にいるスタッフも、そうあるべきと考えることも少なくない。これまで日本スポーツ界ではアスリートのメンタルヘルスはタブー視されることもあり見過ごされてきた。そのため、スポーツ界では、メンタルヘルスケアについて、個別には素晴らしい例が存在するものの、体系的なケア・支援策のあり方が整備されているとは言えない状況であった。海外においては、国際スポーツ機関・学術団体が、この数年で少なくとも 9 件の声明文書を発表し、アスリートのメンタルヘルス支援策の開発、教育・医療・研究への投資の必要性を訴えてきた。実践として、支援マニュアル (IOC Mental Health in Elite Athletes Toolkit) を公開するなど具体的な取り組みが始まっている。

スポーツ界におけるメンタルヘルスケアの発展は、一般社会へのインパクトも大きいと思われる。アスリートは、思春期の子ども・若者に影響を与えられる存在でもある。思春期はメンタルヘルス不調・障害の好発時期であり、この時期には、メンタルヘルスについての正しい理解や適切な対応をとれることなどのメンタルヘルスリテラシー向上が求められる。新学習指導要領では、小中高いずれにおいても心の健康や精神疾患に関する内容の拡充が図られ、全国の小中高校生がメンタルヘルス・精神疾患を学ぶ機会を得た。しかし、子どもの生活の場やコミュニティは学校以外にも存在し、学校教育の整備だけでは十分とは言えない。この点において、アスリートからのメンタルヘルスに関する情報発信は、思春期の子ども・若者のメンタルヘルスリテラシー向上にとって有効なアプローチとなる可能性がある。

演者は、日本ラグビーフットボール選手会との共同プロジェクトを立ち上げ、国内アスリートのメンタルヘルス支援策の開発に向けた研究を進めてきた。具体的には、実態把握のための疫学調査、アスリートによるメンタルヘルスに関する情報発信を行なっている。当日は、これまでの取り組みから得られた知見を紹介する。

【参考文献・資料】

- Ojio Y et al. Anxiety and Depression Symptoms and Suicidal Ideation in Japan Rugby Top League Players. International journal of environmental research and public health 18(3) 1205 - 1205, 2021.
- Ojio Y, et al. Association of mental health help-seeking with mental health-related knowledge and stigma in Japan Rugby Top League players. PLoS One.16(8):e0256125. 2021
- Ojio Y et al. Innovative approach to adolescent mental health in Japan: School-based education about mental health literacy. Early intervention in psychiatry 15(1) 174 - 182, 2021.
- 小塩靖崇ら. アスリートのメンタルヘルスリテラシー教育プログラムに関するナラティブレビュー, 精神医学 = Clinical psychiatry 62(4) 475 - 482 2020
- 小塩靖崇ら. アスリートのメンタルヘルス研究における国内外の状況と展望 精神科 38(4) : 372-378, 2021.
- 小塩靖崇ら. 学校でのメンタルヘルス教育への期待—メンタルヘルスは自分事— 初等教育資料 1008 : 74-77, 2021.6.

よわいはつよいプロジェクト <https://vowatsuvo.com/>



よわいは
つよい
プロジェクト



**なぜ弱さは
強さよりも深いのか**

元陸上競技選手/400mハードル日本記録保持者
一般社団法人アスリートソサエティ代表理事
為末大



**僕の弱みが逆に
人の強みを活かす機会になった**

元ラグビー日本代表 主将
日本ラグビーフットボール選手会 初代会長
廣瀬俊明





こころの健康教室 サニタ <https://sanita-mentale.jp/material.html>

こころの健康教室 サニタ



専門家・研究チーム・教育現場をつなぐICTプラットフォーム

▶ 精神科医・専門医の紹介 ▶ 教育現場の支援へ



製作 :

日本医療研究開発機構(AMED)障害者対策総合委託事業
「児童・思春期における心の健康発達・成長支援に関する研究」班
研究開発代表者：水野雅文（東邦大学）

授業教材（アニメ）

うつ病 統合失調症 不安症 摂食障害 精神保健 +

授業教材（当事者インタビュー）

うつ病 統合失調症 摂食障害・不安症

授業実施校インタビュー動画

保健体育教師 養護教諭 校長 学校医 授業風景

解説集

指導マニュアル 学習指導案 +